

文学部共通専門教育科目『実践日本語表現法』の 実践報告

—学生による小論文相互添削の試み—

Report on “Practical Japanese Literacy” as a subject common to Faculty of Letters
The trial of mutual correction of essay written by students

外山敦子

TOYAMA, Atsuko

はじめに

『実践日本語表現法』は、文学部1年生を対象とした必修の専門教育科目である（2004年4月開講）。受講者479名（2008年度後期実績）を学科別に17クラスに分け、稿者を含む2名の常勤講師が授業を担当している。本科目1クラスあたりの平均受講生は28名で、クラス規模が比較的小さいことが特徴である。

学生に配布する『履修要覧2008〈文学部〉』の「授業の概要」及び「授業の目標」の項には、次のように記している。

【授業の概要】

これから大学で学ぶ専門教育の基礎として、日本語における書く・話す・読む・聞くなどの基本的な技能について学習する。

【授業の目標】

日本語を有効に活用できる基礎的な知識を身につけること、身につけた知識をもとに実践的な能力を養成することを目標とする。

主な授業内容は次の通りである。前期は、話し言葉と書き言葉の違い、正しい文や分かりやすい文の書き方、要旨の捉え方、要約文の書き方など、論理的な文章を書くための基礎を問題演習形式で学んだ上で小論文を書く。後期は、事実と意見の違い、文献収集の方法、引用の方法などを学んだ上でレポートを書く。なお、漢字や語句の使い方に関する小テストも実施している。

本稿では、文学部4学科のうち稿者が担当している国文学科及び教育学科における小論文作成の授業（前期2時間分）の実践を報告する。稿者は昨年、「文学部共通専門教育科目『実践日本語表現法』の現状と課題」（『愛知淑徳大学論集—文学部・文学研究科篇—』第33号、2008年3月）において、初年次教育科目としての本科目の開講意義を確認した上で、現在の授業内容や試行段階の授業実践及び課題について報告した。本稿で報告する授業実践

は、前稿で触れた課題の一部を改善するための試みでもある。

1. 授業の目的

前稿では、学生の文章力向上に関連する課題として次の2点を報告した。第一に学生の応用力不足を限られた授業時間内にかにしていって補うかという問題、第二に教員による文章添削指導の効率化をいかにいって図るかという問題である。

前期の授業では、論理的な文章の基礎を問題演習形式で学んだあと小論文を書いているが、学生の多くは、誤った表現を正しい表現に直す問題は容易に解答するものの、実際に文章を書くときにそれを活かすことができない。そこで小論文の採点を、従来の3段階ないし5段階による「総合評価方式」から、採点基準を細分化・数値化した「加点・減点方式」に変更して、学生に改善のポイントを分かりやすく示す方法を試みた（具体的には前稿で報告済み）。この方法は、採点基準が学生に伝わりやすくなるなどの効果はあったものの、教員の採点時間の大幅増という課題が残った。

日本語運用力、特に文章表現力を養成する本科目において、添削は授業担当者が最も力を入れるべき指導のひとつである。一方、授業担当者1人で受講生250人分の添削を次の授業日までには終わらせるには、ある程度作業の効率化を図ることも視野に入れなければならない。

そこで、学生自身の文章表現力の定着と教員の負担軽減とを同時に達成する試みの一つとして、本年度は「学生による小論文の相互添削」を新たに取り入れた。学生自身に正確な添削が可能なのかという不安や、添削基準に差が生じることも予想されたため、事前にチェックポイントまとめたリストを作成し、学生がリストにしたがって添削する方法を採用し、採点者によって添削基準に差が生じないように配慮した。教員から指摘されるのではなく、自分で問題箇所を発見して学び取る経験を通して、文章力の確実な定着を目指した。目標は、教員の添削に頼らずに、自ら考え正しい文章を書く力（＝自己推敲力）をつけることである。

2. 授業の展開

(1) 演習前の講義

本年度も、小論文演習の前に、話し言葉と書き言葉の違い、正しい文や分かりやすい文の書き方など論理的な文章を書くための基礎を問題演習形式で学習した。教材として本科目のテキスト『書き込み式日本語表現法』（三弥井書店）や補助プリントを使用し、講義と問題演習に3時間程度を費やした。

(2) 演習1時間目

次の課題で600字程度の小論文を書いた。

「電子辞書より、紙の辞書の方がよい」という意見があるが、あなたはどのように思うか。文章は、必ず「事実の報告」、「意見を述べる」、「意見の理由、または意見が正しいことの論拠を述べる」、「自分とは異なる意見を挙げ、それに対して反論する」の順に4つの部分で構成して書くこと。

この課題は、平成19年度第2回「日本語文章能力検定」準2級（高校卒業程度）の問題に若干の修正を加えたものである。ほぼ全員が制限時間内（60分）に提出することができた。

資料①は、本時間に提出された学生A（国文学科1年生）の小論文である。

資料① 学生Aの小論文（1回目提出）

高校生の頃の教室を思い返してみると、電子辞書の普及率は八割を超えており、紙の辞書を使用していた生徒は少数派だった。しかし、英語や古典の先生は紙の辞書を奨励していた。果たして、どちらの辞書がより有用なのだろうか。

私は紙の辞書より電子辞書の方が便利であると考えます。

まず、電子辞書は紙の辞書に比べ小さく軽いのに紙の辞書を圧倒的に上回るデータを有しているため、出先で少し調べものがしたいと思った時、持ち運びしやすくデータを豊富に備えている電子辞書は紙の辞書より便利である。次の理由として検索が容易であるという点が挙げられる。私が漢検の勉強をしていた時、見たことない漢字が多数出てきた。読み方もわからない。紙の辞書であれば総画数で気の遠くなるような数が並んだ漢字を一つ一つ照会していかななくてはならない。しかし電子辞書はタッチペンでその漢字を書くとその漢字がすぐに出てくる。探す時間を大幅に短縮することができる。その二点を鑑みるに電子辞書の方が便利だと言える。

紙の辞書の方が良いという人のなかで、紙の辞書は調べたページを折ったり線を引いたりして、オリジナルの使いやすい辞書に出来るという意見がある。しかし、電子辞書にも、しおりや単語帳といった自分の調べた言葉を記録しておく機能があり、また履歴を見れば今まで自分が調べた言葉が一目瞭然と分かる。このように、紙の辞書の有用性は電子辞書でも代替可能である。紙の辞書の有用性は紙の辞書に特化したことではないのだ。

(3) 演習2時間目

学生1人につき4人分の小論文のコピーを配付し、学生は次ページ資料②のチェックシートを用いてこれを添削した。その後、同じ小論文を添削した者同士（4名）がグループを組み、まずは各自の添削結果を報告した後、グループで改善点を議論した。この添削作業を個人作業からグループ作業への2段階式としたのには、次の理由による。第一に、グループ作業のみの場合は、メンバーによっては意見を言う学生とそうではない学生とに分かれてしまい、議論の公平性が損なわれることがある。第二に、個人作業のみの場合は、修正箇所の見落としや誤りに気づきにくく添削が不完全になりやすい。そのため、個人作業を活かしつつグループにおける議論へと発展するように作業の順序を配慮した。

資料② 小論文チェックシート

内容	<p>a) 「事実の報告」「意見を述べる」「意見の理由、または意見が正しいことの論拠」「自分とは異なる意見を挙げ、それに対して反論する」の順番で書かれていない。</p> <p>b) 「自分の材料」を用いて、事実や意見を述べていない。</p> <p>c) 「事実の報告」について、その事実が正しくない、又は十分な根拠がない。</p> <p>d) 「意見の理由、または意見が正しいことの論拠」について、十分な根拠がない。</p> <p>e) 「自分のとは異なる意見への反論」について、十分な根拠がない。</p> <p>f) 段落を分けていない。又は、分けすぎて違和感がある。</p> <p>g) その他</p>
文章表現	<p>h) 原稿用紙の使い方に誤りがある。</p> <p>i) 誤字・脱字・送り仮名の誤りがある。</p> <p>j) 漢字で書くべきところが、ひらがなで表記されている。</p> <p>k) 誤った語句の使い方がある。</p> <p>l) 句読点が極端に多い、又は少ない。</p> <p>m) 句読点があった方がよい箇所に、ない。または、句読点がない方がよい箇所に、ある。</p> <p>n) 3行以上にわたる長い文がある。</p> <p>o) 語句等の重複がある。</p> <p>p) 「何が」「何を」「どんな」などに相当する表現がなく、意味が通じにくい。</p> <p>q) 文意があいまい。</p> <p>r) 主語と述語、修飾語と被修飾語など、係り受け関係のねじれ・脱落があったり、係り受けの要素が離れすぎたりしている。</p> <p>s) 「が」「て」など、前後の関係が分かりにくい接続助詞の使用がある。</p> <p>t) 助詞使用の誤りがある。</p> <p>u) 敬体（「です」「ます」など）の使用がある。</p> <p>v) 同じ文末表現が繰り返し使われている。表現がたどたどしい。稚拙。</p> <p>w) 「すごく」「なので」などの話し言葉、「バイト」などの略語等、小論文にふさわしくないカジュアルな表現がある。</p> <p>x) 「思う」「感じる」など、小論文にふさわしくない表現が多用されている。</p> <p>y) その他</p>
その他	<p>z) 字数制限を守っていない、又は最後まで書いていない。</p>

次に、グループは議論の結果を踏まえ、小論文の表現及び内容に不備不足がある箇所にアンダーラインを引き、資料②の各項目に該当する記号を書き入れる。この方法は、塚本真也「工業系学生向け表現授業『日本語力教育』」（『言語』第37巻第3号、2008年3月）の添削指導の方法を参考にした。氏は、10数年前まで学生の卒業論文を真っ赤になるほど添削していた。ところが、2年後の修士論文でも同じように間違いだらけで進歩の跡がみられなかったという経験から、詳細な添削は施さず、不備にアンダーラインを引いて返却し、学生自身がどこが悪いのかを考えた上で書き直し再提出する方法に変更して、効果があったという。教員による詳細な添削は、学生に問題の解き方ではなく解答そのものを教えているようなも

のであり、学生の自己推敲力はかえって向上しないのである。

そこで、今回は添削グループの役割を問題箇所の発見および内容に関する疑問の提示のみとし、修正そのものは執筆者本人が行うようにした。資料③は、学生グループによる学生Aの小論文の添削結果である。

資料③ 学生Aの小論文への添削グループの指摘

高校生の頃の教室を思い返してみると、電子辞書の普及率は八割を超えており、紙の辞書を使用していた生徒は少数派ⁿだった。しかし、英語や古典の先生は紙の辞書を奨励していた。果たして、どちらの辞書がより有用なのだろうか。

私は紙の辞書より電子辞書の方が便利である^wと考える。

まずⁿ、電子辞書は紙の辞書に比べ小さく軽い^wのに紙の辞書を圧倒的に上回るデータを有しているⁿので、出先で少し調べものがしたいと思った時、持ち運びしやすくデータを豊富に備えている電子辞書は紙の辞書より便利である。次の理由として検索が容易であるという点が挙げられる。私が漢検の勉強をしていた時、見たことない漢字が多数出てきた。読み方もわからない。紙の辞書であれば総画数で気の遠くなるような数が並んだ漢字を一つ一つ照会していかななくてはならない。しかし電子辞書はタッチペンでその漢字を書くとその漢字がすぐに出てくる。探す時間を大幅に短縮することができる。その二点を鑑みるに電子辞書の方が便利だと言える。

紙の辞書の方が良いという人のなかで、紙の辞書は調べたページを折ったり線を引いたりして、オリジナルの使いやすい辞書に出来るという意見がある。しかし、電子辞書にも、しおりや単語帳といった自分の調べた言葉を記録しておく機能があり、また履歴を見れば今まで自分が調べた言葉が一目瞭然で分かる。このように、紙の辞書の有用性は電子辞書でも代替可能である。紙の辞書の有用性は紙の辞書に特化したことではないのだ。

疑問点 について。タッチペンがついていない電子辞書もある。

グループによる指摘の一部を具体的に見てみよう。

5行目「電子辞書は紙の辞書に比べ小さく軽い^wのに紙の辞書を圧倒的に上回るデータを有しているⁿので、出先で少し調べものがしたいと思った時、持ち運びしやすくデータを豊富に備えている電子辞書は紙の辞書より便利である」では、チェックシートの「k」誤った語句の使い方がある」「n」3行以上にわたる長い文がある」「w」話し言葉や論説文にふさわしくないカジュアルな表現がある（正しくは「軽いにもかかわらず」、「外出先」）の4カ所を指摘している。10行目「タッチペンでその漢字を書くとその漢字がすぐに出てくる」は、同シートの「o」語句等の重複がある（正しくは「タッチペンで入力すると目的の漢字がすぐに出てくる」）を指摘した。15行目「自分が調べた言葉が一目瞭然で分かる」では、同シートの「k」誤った語句の使い方がある（正しくは「一目瞭然である」または「一目で分かる」）を指摘した。内容に対しては、学生Aが、電子辞書はタッチペンで漢字を入力すれば即座に目的の漢字が見つかる点を電子辞書の利点に挙げたが、添削グループは「タッチペンがついていない電子辞書もある」とし、一部の電子辞書にしか当てはまらない

ことを指摘した。

以上のように、添削グループは、アンダーラインを引いて修正内容を記号によって示したが、修正は施していない。内容についても疑問を提示するのみである。資料③はいったん授業担当者が回収した後、執筆者に渡した。執筆者は添削グループの指摘を参考に書き直し、一週間後に再び提出した。資料④は、学生Aの2回目の小論文である。

資料④ 学生Aの小論文（2回目提出）

私が高校生のころの教室を思い返してみると、電子辞書を使っていた人は八割を超えており、紙の辞書を使用していた人は少数だった。その一方で、英語や古典の先生たちは、しきりに紙の辞書を使うよう薦めていた。果たしてどちらの辞書が、より役に立つのだろうか。

私は紙の辞書より電子辞書の方が便利であると考えます。

第一に、電子辞書は紙の辞書に比べて小さく軽いにもかかわらず、紙の辞書の何冊分もの情報を収載している。外出先で少し調べものがしたいと思ったとき、持ち運びやすくデータも豊富な電子辞書は便利である。第二に、語彙検索が容易である。私が漢字検定の勉強をしていたとき、見たこともない漢字が頻出した。読み方も部首も分からない。こうした場合、紙の辞書ならば総画数索引で一万語もの漢字の羅列から目的の漢字の一つひとつ確認していかねばならない。これがタッチペン付きの電子辞書ならば、付属のペンで入力するだけで、即座に目的の漢字が画面上に登場する。探す時間を大幅に短縮することが可能なのだ。

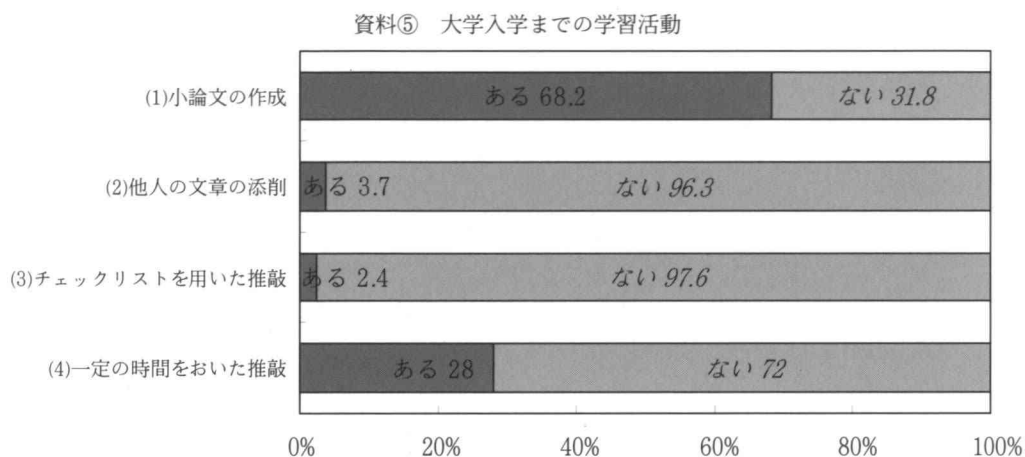
紙の辞書の方が良いという人の中には、紙の辞書は調べたページを折ったり線を引いたりして独自の使いやすい辞書に出来るという意見もある。しかし、電子辞書にも「しおり」や「単語帳」といった機能があり、また履歴を確認すれば、今まで自分が調べた語彙は一目瞭然である。このように、紙の辞書の長所は、今や電子辞書でも代替可能である。紙の辞書の利便性は紙の辞書に特有のものではなく、従って私は電子辞書の方が役に立つと考える。

学生Aの2度目の小論文は、資料③下線部の修正だけでなく、添削グループが指摘しなかった部分にも修正が施されている。例えば最初の小論文（資料②）では、「どちらの辞書がより有用なのだろうか」「紙の辞書の有用性は電子辞書でも代替可能である。紙の辞書の有用性は紙の辞書に特化したことではないのだ。」などのように、「有用」ということばを繰り返し使用している。それに対して推敲後の小論文（資料④）では、「どちらの辞書が、より役に立つのだろうか。」「紙の辞書の長所は、今や電子辞書でも代替可能である。紙の辞書の利便性は紙の辞書に特有のものではなく、(後略)。」とあるように、それぞれを別の適切なことばに置き換えており、表現に工夫がみられる。今回は、授業終了後に学生にアンケートへの回答を求めたが、学生Aは、「他人の文章を添削した後改めて自分の文章を見直すことで、初めは気づかなかった表現上の誤りや、以前ならば直そうと思わなかった箇所にも気づくことができた。有意義な経験だった。」と答えている。

3. 本取り組みの成果と課題

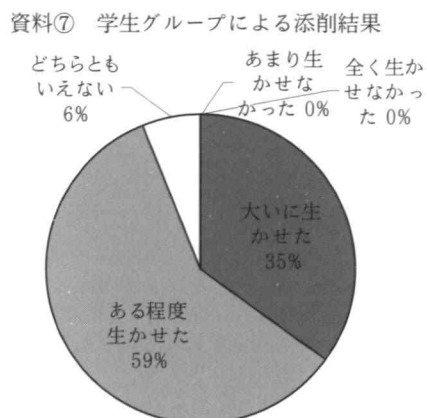
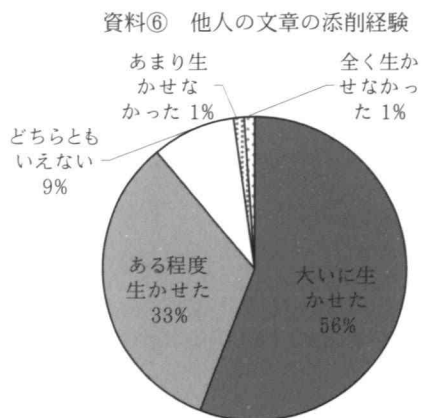
最後に、本取り組みの成果及び課題を、授業終了後に行った受講生アンケートから指摘しておきたい。

今回の学習内容は、(1) 小論文作成、(2) 他人の文章添削、(3) チェックリストの活用、(4) 一週間後の推敲、に分けられる。まずは、大学入学までに(1)～(4)と同様の学習を経験したことがあるかを尋ねた。



資料⑤によれば、(1) 小論文を書いた経験のある学生は7割近くいたものの、(4) 一定期間をおいて書き直した経験のある者は3割程度にとどまった。高等学校までは、同じテーマで繰り返し書き、表現や内容の完成度を高めていく機会是与えられていないことが分かった。加えて、(2) 他人の文章添削と、(3) チェックリストを用いた添削については、ごく一部を除きほとんどの学生が経験していないことも分かった。したがって、今回の学習活動は大部分の学生にとって初めての体験であったことになる。

次に、今回の学習活動が小論文作成の役に立ったかを尋ねた。



資料⑥では、他人の文章を添削した経験を自分の推敲に生かすことができたかを尋ね、9割近くの学生が「大いに生かさせた」「ある程度生かさせた」と回答した。同様に、資料⑦では、学生グループによる指摘を2度目の小論文作成に生かすことができたかを尋ね、9割を超える学生が「大いに生かさせた」「ある程度生かさせた」と回答した。以下、学習後の学生の感想の中から最も多かった意見について、その一部を取り上げる。

(1) 添削経験による自己推敲力の向上を指摘したもの

- ・人の文章を添削することで、自分にも当てはまる部分を見つけることができ、次に文章を作成する際に活かそうと思うことができた。(国文1年)
- ・自分には思いつかなかった表現の工夫のある人がいて、参考になった。(教育1年)
- ・ただ自分で小論文を何度も書くよりも、一度他人の文章を添削作業すると、大変勉強になると思った。他人の文章を読むことで、自分もこういう部分に気をつけなければいけないということがわかった。(教育1年)
- ・他人の添削をしてみたことで、自分の文章を客観的に見ることができるようになる。これからは他人の文章添削がなくても、初めから自分で推敲できるようにしたい。(国文1年)
- ・添削するという事は、自分の実力が試されることだ。(国文1年)

(2) 他者意識を持つことの重要性を指摘したもの

- ・他人の文章を添削するように自分の文章を推敲することができれば、良い文章を作成できると思った。(教育1年)
- ・論説文は単に長く書けばよいというものではなく、はっきりすっきり書いた方が伝わりやすい。(国文1年)

(3) グループ学習のメリットを指摘したもの

- ・1人で添削していたら気づかなかった所も、グループ作業だからこそ気づくことができた。他の人が指摘した箇所は、なぜそれを直す必要があるのかを考えることができて、勉強になった。(教育1年)

(4) チェックリスト活用のメリットを指摘したもの

- ・チェックリストがあったおかげで、グループで活発な意見交換ができた。（教育1年）
- ・今後は、文章を書き終えた後チェックシートを活用して見直してから提出したい。（国文1年）

他人の文章添削を経験することで、他人の視点で文章を見直すことの必要性を体験的に学び、それを自己点検に応用することができたのは、今回の学習の成果である。資料⑥⑦は、本取り組みに対する学生の満足度の高さを示しており、本取り組みが一定の成果を挙げたと判断してもよい結果であったといえるだろう。

一方、アンケートからは今後に向けた課題も浮かび上がってきた。資料⑥と資料⑦を比較すると、「大いに生かせた」と回答した者の割合が、資料⑥は56%なのに対し、資料⑦では35%にとどまっている。その理由を探る上で重要と思われる学生の指摘を次に挙げる。

- ・指摘されたものの方が間違っていると感じる部分があった。もしかしたら自分も誤った添削をしているのではないかと思う。（国文1年）
- ・文章の言い回しや助詞・指示語の使い方は人によって感覚が違うようで、指摘されていても納得しづらいところもあった。（国文1年）
- ・自分の文章を添削してもらった時、そのグループの子たちが何を指摘してきたのかわからない部分があった。もっと分かりやすく指摘してほしい。（教育1年）

いずれも、今回の添削者が授業担当者ではなく学生であったことによるとまどいである。グループ添削では、修正の必要のない箇所にアンダーラインを引いていたケースも、僅かではあるが存在した。机間巡視を徹底し、議論の方向性に問題がある場合は早めに声をかけるなど、適切な指導を心がけたい。

おわりに

本稿では、学生の自己推敲力を向上させる試みとして、「学生による小論文の相互添削」を取り入れた授業の概要と、学習の成果及び今後の課題について報告した。授業計画の都合上、今年度は残念ながら本取り組みを一度しか試みることができなかった。反復学習による効果の測定など課題も残るが、これについては稿を改めて報告したい。

なお、チェックリストについては、今後様々な活用方法を考えてみたい。例えば、リストの各項目にあらかじめ自己点検用の□を作っておき、すべての項目を☑にした上で、課題とリストを一緒に提出する「自己点検方式」を採用などである。また、今回は小論文用に点検項目を作成したが、レポートなど提出物の種別に応じて項目に修正を加えれば、活用範囲もより広がるのではないか。今後も引き続き学生の実状に即した授業改善に全力を注いでいきたい。